

## *The Great Gatsby* 翻訳

——オールド・スポーツと比喩的表現——

### *Gatsby* Translation : In the Case of “Old Sport” and Figurative Expression

Sachiko Suganuma

菅沼 幸子

#### 要 旨

小論は、文化的言語的背景を異にする文学翻訳に当たって、原文読者が享受する印象に近いものを翻訳読者も受けられるような、効果的な翻訳の手法を得ることを目的としている。そのため、テキストとして F. Scott Fitzgerald (1896-1940) による *The Great Gatsby* (1925) を選定し、これの日本語翻訳の中から事例を抽出して分析、考察することとした。翻訳事例には野崎孝の『グレート・ギャツビー』(1974)、村上春樹の『グレート・ギャツビー』(2006)、小川高義の『グレート・ギャツビー』(2009) を選定した。

分析の対象事例は、“old sport” と比喩的表現の翻訳を取り上げている。“old sport” は小説中頻出する主人公 Gatsby の口癖であるが、彼の深い望みを秘めた語で彼とは切っても切れない重要表現である。しかし、日本語には相応する適切な語が見当たらない。また、この小説は比喩的表現を多用して美しくも力強い文章で有名である。しかし、比喩的表現は作者と読者が認識を共有してこそ通じるもので、社会、文化の異なる翻訳読者にどのように伝えるかによって受け取る印象が原文と違ったものになる可能性がある。

このような難問を各翻訳者はどのように克服したのだろうか。事例分析を通じて各翻訳者の効果的な手法を学ぶことができるだろう。

キーワード：翻訳 “old sport” メタファー

## はじめに

小説の成り立ちというものは、作者と読者が言葉というものについて、共通の知識と理解を持っているということが前提としてあるといえる。外国文学を翻訳するときには、当然異なった文化的土壌にある原文と翻訳文をつながなくてはならない。昨今のインターネットやメディアの発達、またカタカナ外国語の流入などの理由により、人々の持つ外国の文化や外国語の知識量が増えたとはいえ、原文との本来的な共通認識のない翻訳読者に原文の持つメッセージや印象を届けるために翻訳文ではどのように表現すればいいのだろうか。この命題の解に近づくために Eugene Nida (1914-2011) のセオリーを物差しとして利用し現存する翻訳を分析し、考察することとした。Nida が自著 *Toward a Science of Translating: With Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating* (1964) において指摘した“Dynamic-Equivalence (D-E)” (166) がヒントを与えてくれるかもしれない。彼は“D-E”について、翻訳者が原文を正確に理解し、それをできるだけ翻訳言語側の社会的文化的に自然な言語で翻訳する翻訳法 (166) であると説明し、それを“equivalent,” “natural,” “closest” の三語で表している。

原文テキストとして F. Scott Fitzgerald (1896-1940) による *The Great Gatsby* (1925) を選定し、翻訳テキストとして現存する 9 翻訳の中から 3 翻訳を選定した。*The Great Gatsby* を選定した理由は、1920 年代のアメリカ文化と時代の状況を表現し名文と高評価を得ているため、これの翻訳を研究することは本論の目的にとって有効であること、日本語翻訳が多く存在するため分析する翻訳テキストの選定に便宜的であることなどである。このテキストは特に比喩的表現、造語、撞着語法、そして主人公 Gatsby が連発するものの日本語には相応する語がないため翻訳に際して困難が伴う呼びかけ語の“old sport”などを効果的に使っている。比喩などの言語表現はその地域の文化や言語に深く密着して形成されてきたものであるもので、異なった文化で形成された言語に翻訳するときには一般的に翻訳者は非常に困難に直面する。このような文化的差異に起因する困難を翻訳者はどのように克服し、原作のテーマに沿っていかにか“D-E”的に翻訳しているのかについて考察することは有意義であると考えられる。今回は、紙数の制限により、重要表現である“old sport”と比喩的表現に焦点をあてて、いくつかの事例を抽出し、分析を試みる。これについては、分析対象選定理由の章においてもう少し詳細に述べる。

分析対象翻訳としては、翻訳年次に注目し、最初の翻訳者である野崎孝の『グレート・ギャツビー』（1974）、それから約30年のギャップのある村上春樹の『グレート・ギャツビー』（2006）、現存する中では最後の翻訳である小川高義の『グレート・ギャツビー』（2009）を選定した。3翻訳者の詳細は後述する。

### 翻訳者

日本語翻訳は表Iのとおり、野崎孝の4作品を含んで9つ現存する。この中から上述したとおりそれぞれその時代を代表する翻訳者による3翻訳を分析対象として選定した。

表I *The Great Gatsby* 日本語翻訳

出版年	翻訳者	翻訳タイトル	出版社
1957	野崎孝 (1917-1995)	偉大なるギャツビー アメリカ文学選集	研究社出版
1957	大貫三郎 (1916-2003)	華麗なるギャツビー	角川書店
1974	野崎孝	グレート・ギャツビー	新潮社
1974	橋本福男 (1906-1987)	華麗なるギャツビー	早川書房
1978	守屋陽一 (1930-1999)	華麗なるギャツビー	旺文社
1979	野崎孝	偉大なギャツビー 集英社版世界文学全集	集英社
1994	野崎孝	偉大なギャツビー	集英社
2006	村上春樹 (1949-)	グレート・ギャツビー	中央公論新社
2009	小川高義 (1956-)	グレート・ギャツビー	光文社

まず、野崎孝から説明すると、彼はアメリカ文学研究者であり、*Gatsby* の他に J. D. Salinger (1919-2010) の *The Catcher in the Rye* (1951)、Ernest Hemingway (1899-1961) による *The Old Man and the Sea* (1952)、その他の翻訳がある。*Gatsby* 翻訳に関していうと、野崎は1957年に『偉大なるギャツビー』というタイトルで最初の出版をしているが、彼自身も1974年版の解説で「かなりの改定を加えた」（野崎1974, 301）と言っているとおり、その後数回にわたってタイトルとともに翻訳も少しずつ改定している。そこで、今も広く読み継がれている1974年版をテキストとして選定

した。

村上春樹について言えば、ノーベル賞に何度もノミネートされるほどの小説家である。更に翻訳者としても多くの作品を手掛けており、*The Catcher in the Rye*、や Raymond Carver (1938-1988) の短編集などの翻訳がある。『グレート・ギャツビー』の訳者後書において『ギャツビー』は「僕にとってきわめて重要な意味を持つ作品」(333) と紹介し、翻訳にあたっては「小説家であることのメリットを可能な限り活用してみようと、最初から心を決めていた」(337) と述べている。

小川高義は英文学者であり、『グレート・ギャツビー』の他に『さゆり』として映画化された Arthur Golden (1956-) による *Memoirs of a Geisha* (1997)、その他の翻訳がある。

### 分析対象事例選定理由

先述した通り、特に文学翻訳においては、翻訳読者も原文読者が受けるものに近い印象を受けられることが望ましい。もし、作品の意図が十分伝わらなければ翻訳読者は作品のテーマを受け取り難いし、更にその小説を十分に楽しむことも難しいかもしれない。それ故翻訳者は翻訳に当たって最も効果的な手法を創造する必要がある。このような難題を翻訳者はどのように克服しているのだろうか。翻訳事例を分析研究し、その手法を探ることは、この小論のテーマである、翻訳読者に原文の持つメッセージや印象を届けるための手法を得るということに合致する。但し、紙数制約のため、“old sport” から 2 例、比喩的表現から 3 例を抽出して分析するにとどめたい。

まず“old sport”からその選定理由を述べる。この語は主人公 Gatsby を象徴する呼びかけ語である。彼は相手が召使と女性の場合を除いて、時と人を選ばずに“old sport”と呼びかける。Gatsby その人の全体像を一言で象徴する重要表現であるが、日本語に同等の語がないこの言葉をどのように日本語に訳すかということは『ギャツビー』翻訳上一つの重要な鍵となる。

更に、比喩的表現についてである。この小説の文体の大きな特徴の一つはメタファー等を多用することによって登場人物の考えや感情などを美しく生き生きと表現していることにある。しかし、先述したとおり、比喩的表現は特に言語の属する社会的文化に深く根差しているものから、Shani Tobias も “there is never ‘equivalence’ . . . the translation process involves interpretation and a mapping of linguistic, semantic, and

cultural elements to a completely new environment” (8) と言っているように、それを全く違った土壌の日本語に移すことには困難がつきまとう。メタファーを直訳しても読者に意味が通じないこともあるだろうし、かといってあまりにも自由に意訳しすぎて原作の意図からズレが生じる場合もあるだろう。翻訳者はどのようにこの難問に取り組んでいるのか、分析の上考察したい。

### 事例 A “old sport”

上述したとおり、“old sport” は Gatsby のキャッチ・フレーズである。「自分は上流階級出身であり、Oxford も出ていると人に思われたい。そして上流階級の Daisy の愛を手に入れたい」という彼の内心の願望を見事に表す語である。

実際この英語を聞いた人はどのような印象を受けるのだろうか。二人のネイティブ・スピーカーに取材してみた。一人は Blair Matangi で、Cambridge 大学卒業生である。「“old sport” は 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて使われた少し古いイギリス英語表現で、上流階級出身の男子だけが仲間内で使用したものである」というものであった。もう一人は Tina Ottman で Oxford 大学出身である。「“old sport” は古いイギリス英語表現で Eton や Harrow などのパブリック・スクールへ通うエリート男子生徒の中で使用され、このような学校はたいてい Oxford や Cambridge 大学または Sandhurst Military Academy へ生徒を送り込んだものだ。しかし、今日ではこの語を聞けば少し古風に感じるだろう」というものであった。

これらの取材結果から考察すると、“old sport” は上流階級出身で prep-school の男子生徒のみの中で上級生から同等または下級生に対して使用されていた社会方言であり、聞いたものに「この語を使用する男性は上流階級出身に違いない」という思い込みを与えることが出来る特別な語であることがわかる。しかし、これは逆にこのような語を使わずにいられない Gatsby の、不法な手段で現在の豪奢な生活を支えているという状況の不安定さを暗示することにもなっている。そして、親しい人ばかりでなく、スピード違反で捕まりそうになった警官や、仕事上の部下らしき人からの電話応対にも使用することから、彼の風変わりさをも象徴している。元恋人 Daisy の現夫である上流階級に属する Tom Buchanan との彼女の愛をめぐるの諍いの場面で Tom への使用に至っては Tom を激怒させる引き金となる。このような様々な場面でいつも同じ “old sport” が使われるが、英語の場合は同じ語を使うことによって Gatsby

の奇妙さや悲しみが表現されるが、同等な日本語が無い中で、これをどう翻訳するかは大きな問題である。

この小説中、この語は45回発現し、その内42回は Gatsby が、2回は Tom が、そして、最後に Gatsby の死後、この小説の語り手であり、登場人物の一人でもある Nick Carraway の心の中に聞こえる Gatsby の声として出現する。野崎はこの45回の内3回を翻訳省略し、残り42回をすべて「親友」と訳している。村上は最初の一回目に「<sup>オールド・スポーツ</sup>あなた」(91)と訳してカタカナでオールド・スポーツとフリガナをつけた以外は、全部カタカナで「オールド・スポーツ」と訳している。小川はその時々文脈解釈による訳とし、“old sport” そのものを訳していない。

では、実際に事例を分析してみたい。事例1は Gatsby の風変わりさを示唆する部下への使用例で、事例2は Tom から Gatsby に対して発話されたものであり、Tom が激怒していることが示されている。

**事例 A-1** “Yes, . . . Well, I can’t talk now . . . I can’t talk now, old sport . . . I said a small town . . .” (121)

野崎：「もしもし。 . . . さあ、いまは話してられない。 . . . いまはだめですよ、親友。 . . . 言ったんです。」 (153)

村上：「ああ . . . いや、今はちょっとはなせない . . . 今はとにかく無理だよ、オールド・スポーツ . . . 言ったはずだぜ . . .」 (174)

小川：「そうなんだが . . . いまちょっと . . . いまは話してられない . . . 言った。」 (152)

このシーンでは Gatsby の話し相手は多分彼より低い地位の者である。しかし、野崎は“old sport”を「親友」と訳したうえで、丁寧表現である「一です」を語尾に使用している。Nick の説明によると Gatsby の発話は常に “[Gatsby’s] elaborate formality of speech just missed being absurd “(62) であるらしいので、このような丁寧な発話形式は Gatsby にふさわしい。

村上はカタカナで表音した「オールド・スポーツ」を日本語翻訳としている。その他には、語尾に「一だよ」とか「一だぜ」を使用することにより、男っぽさを表現し、しかも同等もしくは低い地位の者への会話として適当なフランクさを表出してい

る。しかし、“old sport”の最初の説明的翻訳、「<sup>オールド・スポーツ</sup>あなた」(91)を覚えている読者はこのフランクな表現と「あなた」という丁寧な呼びかけの差異に戸惑うかもしれない。もしくは、カタカナの「オールド・スポーツ」の意味が理解しがたいかもしれない。

小川は“old sport”の翻訳そのものを省略している。この事例の場合、電話中であって、相手はその人しかいないので、特に相手に対して呼びかけなくても話は通じる。むしろない方が日本語としては自然かもしれない。ただし、誰に対しても、いつでも、呼びかけているからこそ風変わりと見られるわけで、この奇妙さがあまりにも自然な翻訳で失われているのも事実である。

#### 事例 A-2 “Don't you call me ‘old sport!’” . . . (173)

野崎：「よしやがれ！おれを『親友』だなんて！」(221)

村上：「僕に向かって『オールド・スポーツ』って言うのはよせ！」(244)

小川：「そういう気障な口をきくなど言ってるんだ！」(219)

Plaza Hotel において、Gatsby, Daisy, Tom, Nick たちが集まっているところで、Daisy を間に挟んで Gatsby と Tom は一触即発の状況にある。そんな時に、Gatsby が Tom に対して言った言葉、“Why not let her alone, old sport?” (163) が Tom の激怒を誘引した。Tom にしてみればどこの馬の骨だ位にしか思っていない Gatsby に同等もしくは目下に使用する“old sport”で親しく呼ばれたわけである。

この場合、野崎の「親友」が一番インパクトが強いかもしれない。妻の愛人から「親友」呼ばわりされたら大抵の夫は怒るだろう。この小説全体の中でも、45 回を通じて、その意味合いを囚って訳せば「親友」が一番適当かもしれない。しかし、通常、呼び掛け語として「親友」は使用しないのでその点では少し不自然ではある。

村上の「オールド・スポーツ」はほとんどの読者にとって意味不明であるかもしれない。

村上は「翻訳者として、小説家として—訳者あとがき」において、このカタカナのまま置かれた「オールド・スポーツ」について次のように説明している。「もう 20 年以上にわたって『ああでもない、こうでもない』と考えに考えて来た・・・『オールド・スポーツ』と訳す以外に道はない・・・作品中のキーワードとして使われている

以上、そのままの形を残す以外に手はなかった」(354)と。しかし、カタカナの「オールド・スポーツ」は外来語としてもまだ日本語に浸透してはいない。読者には最初の説明的翻訳「あなた」が常に思い出され、ここでは丁寧に「あなた」と呼ばれて怒る理由がわからないだろう。

小川はやはりここでも訳出していない。後書において「ギャッツビーの口調全体に、どこで覚えたのかと言いたくなるような気取りが出ていれば良いものとして処理した」(298)と述べている。しかし、一回もそれらしき翻訳語のない時、“old sport”によって表現された Gatsby の風変わりさは失われるだろう。更に、小川の訳の場合、「そういう気障な口」の「そういう」は「いやあ、すっからかんでお困りでしたから、いくらか儲かって大喜びだったのですよ」(219)という前節の言葉を差し示し、原文の“old sport”と呼ばれたことによって激怒する状況と齟齬を来している。もっとも、キーワードだから捨てられないという固執を捨て去り、その時々文脈によって翻訳を考えるという点では、“D-E”と言えるかもしれない。

問題をカタカナ訳「オールド・スポーツ」に戻すと、Theodore Ted Goossen はカタカナのまま置くことに次のように賛同を示している。“When he [Murakami] comes to a crucial yet untranslatable phrase such as “old sport,” he has the option—which he takes—of leaving it in English” (186). 更に、日本の読者は映画などを通じて *The Great Gatsby* やアメリカのその時代について多くの知識を持っており、村上はその状況に頼ることが出来るとも言っている。(185)

しかし、本当にそうだろうかということを確認するため、アンケートを実施し、115人から回答を得、表Ⅱのとおり取りまとめた。

表Ⅱ カタカナ翻訳「オールド・スポーツ」について読者の印象

Future Understanding Through Reading				Readers' Attitude					
Would Understand	Reading or Watching Experience	Would not Understand	Reading or Watching Experience	Acceptance of English in Katakana	Would Understand	Prefer Some Japanese	Would Understand		
58	23	21	11	28	17	81	39		
Total Answer			Understanding Level of Meaning			Impression of 'Old Sport'			
Total	Experience		Completely	Vaguely	Not at All	Elderly Sportsperson	Traditional Sports	Form of Address	Others
	Read Book	Watch Film							
115	24	37	1	36	77	5	36	60	2

回答者のほとんどが20代前半の英語を勉強している女子大学生なので、男性回答者数の少なさと年齢層の偏り、更に回答者に英語の知識があるという点でアンケート結果にある程度は影響を与えているかもしれない。

この表からわかることは、読者はやはりなんらかの日本語翻訳を望んでいるということである。

本を読んだ、または映画を見た経験のあるものが53.0% (24+37 重複回答含) にのぼる中で、67.0% (77人) が「オールド・スポーツ」の意味を理解しておらず、70.4% (81人) が日本語訳の方が良いと考えている。67% が意味を理解していないと答えているが、52.2% (60人) がこれは呼びかけ語だとは理解している。これは、ほとんどの回答者が英語を理解する者であったことから、アンケートに例示した原文英語を見て、呼びかけ語と理解した可能性もある。更に、50.4% (58人) が読書が進むにつれて徐々にその意味が解って来ると答え、その中では39.7% (23/58) が読書または映画鑑賞の経験がある。しかし、18.3% (21人) が理解は進まないと答え、その中で52.4% (11/21) が読書または映画鑑賞経験がある。70.4% が日本語翻訳が良いと答えているものの、その内48.1% (39/81) が後に意味は解って来ると回答している。カタカナ英語の「オールド・スポーツ」については24.4% (28人) がカタカナでもよいと答え、その内60.7% (17/28) が後に意味は解ると答えている。しかし、日本語の方が良いと回答した81人のうち、51.9% ((81-39)/81) は読書後も意味を理解することは難しいと考えていることがわかる。

これらの結果から、映画鑑賞などの経験はやはり全体的な理解に影響しているし、半分以上の回答者が読書の進行につれて徐々に「オールド・スポーツ」の意味は解って来ると回答しているものの、やはり大多数の者がカタカナで音を表すだけではない、なんらかの日本語訳が必要と考えていることがわかる。実際のところ、“old sport” を直接表すような日本語はなく、代替となるような語を探すのも難しいことは事実であるが、やはりこの小説内で“old sport” という一語の果す役割の大きさを考えるとこの言葉の背景にある Gatsby の願望を表すような含蓄の籠った何らかの日本語の必要性が痛感される。

私自身はこの語に対して不十分ではあるが、「君」という訳を当てたい。この語は主に男性が同等もしくは自分以下の者に対して使用する (デジタル大辞泉)。小松寿雄によると、「君」は後期江戸時代には既に知識階級の人の中で使用され始め

(670)、明治になって書生言葉として普及した (682) そうだ。だから、Gatsby の Oxford 卒気取りに合うし、Tom は下目に見ている Gatsby から自分の妻をめぐる諍い中に「君」と呼びかけられたら多分激怒するのではないだろうか。

### 事例 B 比喩的表現

先述した通り、*The Great Gatsby* は比喩的表現を多用した美しい文章で知られている。この比喩的表現翻訳を巡って 3 翻訳者の手法を分析考察し、効果的な翻訳手法を得ることはこの小論の第 2 の目的である。比喩的表現の分類は Yoko Hasegawa の “figurative meaning” (85) (*The Routledge Course in Japanese Translation*) によった。各事例抽出のポイントとなるところは次の通りである。

事例 1 は “the world and its mistress” (78) がメタファーであり、この語句をどう訳すかがポイントである。

事例 2 は 2 つのセンテンスからなっている。2) -1 の方は Daisy の声を “full of money” (154) と例えるメタファー、2) -2 の方は Nick の Daisy の声に対する再認識であり、“the inexhaustible charm . . . golden girl” (154) と声の持つイメージと共に Daisy その人の属性を表現している。

事例 3 は “we” と “boats” (233) がメタファーである。これらの語が使われる文節は小説の最後の一節で、短いがこの小説の持つ普遍的なテーマを表現する最重要箇所である。テーマをどう解釈するかによって翻訳が変わって来る。

では、実際に事例を考察してみたい。

**事例 B-1** “On Sunday morning while church bells rang in the villages alongshore, the world and its mistress returned to Gatsby’s house and twinkled hilariously on his lawn” (78).

野崎：「日曜の朝には海沿いの村々に教会の鐘の音が響きわたる中を、気どりますました者たちがだれかれとなくふたたびギャツビーの邸宅に舞いもどり・・・」  
(98)

村上：「日曜日の朝、海岸沿いの村々に教会の鐘が鳴り響くころ、世界とその女王たる太陽が、ギャツビーの邸宅に再び立ち戻り・・・」(115)

小川：「日曜日の朝、海岸沿いの村の教会が鐘を鳴らしている頃合いに、世俗の男女

がギャツピー邸に舞い戻り・・・」(99)

この場面は Gatsby が開くパーティの豪華さを述べるところから始まっている。このパーティに招かれた Nick はたまたま持っていた列車の時刻表の余白に出席している有名人のリストを書き留めている。更に、土曜、日曜ともなると Gatsby の邸宅の状況がどうなるかを Nick は次のように描写している。

In his blue gardens men and girls came and went like moths among the whisperings and the champagne and the stars. . . . On week-ends his Rolls-Royce became an omnibus, bearing parties to and from the city between nine in the morning and long past midnight . . . (50).

有名人出席者を始め、人々のパーティでの様子からは彼らの無秩序ぶりや、Gatsby の富裕ぶりがわかる。日曜日に教会の鐘が鳴れば日曜礼拝に行くのかと思いきや、彼らは Gatsby の庭へ戻って行くのだ。

とはいうものの、“the world and its mistress” とは何を表しているのだろうか？上の引用を見ると、土曜日曜といえども朝から夜中までパーティ客が押しかけて来ていることがわかる。多分“the world and its mistress”は町からやって来た男女であろう。日曜の朝にパーティとは少し奇妙だが、そこは Gatsby のことだから何でも起こりうるということを Nick による上記描写が示唆している。

この“the world and its mistress”の解釈が翻訳者によって二つに分かれている。

野崎と小川は表現は違うものの、とにかく俗世間の人間と解釈している。しかし、村上は世界とその女王と解釈したようで、「世界とその女王たる太陽」と訳した。『研究社新英和中辞典』(web)によると、“mistress”には二義的な定義ではあるが、女王という意味もたしかにある。ただし、その定義説明には夜の女王(月)とあり、太陽ではない。ただ、日本神話では女性の太陽神アマテラスが存在するので、もしかしたら村上はこれを念頭に置いたかもしれない。しかし、時刻に着目すると、村上訳では日の出直後と考えられるが、原文では教会の鐘が鳴っており 11 時ごろと想像される。この時刻のずれを考えると、アマテラスには疑問が残る。

事例 B-2-1 “Her voice is full of money.” . . .(154).

野崎：『あの声はお金にあふれているんです』と、いきなり彼はそう言った。」(196)

村上：『彼女の声にはぎっしり金が詰まっている』とギャツビーはあっさりと言った。」(218)

小川：「すると不意にギャツビーが、『金にまみれた声ですよ』」(195)

この事例は Daisy の提案でニューヨークの Plaza Hotel へ出かけようと準備をする Tom たちを待っている少しの間に、Tom の邸宅の玄関で Gatsby と Nick が交わした Daisy の声についての会話の一部である。Nick が何か言おうとした時に、Gatsby がそれを引き取って、“full of money” と表現した。この言葉を受けて Nick は Daisy の本質について理解するが、その理解の内容が次に続く彼のナレーション、“It was full of money—that was the inexhaustible charm that rose and fell in it, the jingle of it, the cymbals’ song of it. . . . high in a white palace the king’s daughter, the golden girl. . . .” (154) によって美しく説明されている。それは、Daisy の属する階級が上流であることを再認識し、実は貧農の出身である Gatsby が Daisy の愛を獲得することの不可能性を示唆するものである。そして、その後 Plaza Hotel では Gatsby と Tom の諍いが始まるのである。この Daisy の美しい声を表す“full of money”をどう訳すかがこの事例のポイントである。

野崎は「お金にあふれているんです」と訳した。これは Daisy の必要とする計り知れない富の量を表す言葉として適切である。更に、「お金」と「お」をつけて「金」を美化し、更に語尾を「んです」として「のです」をたわめつつうまく「一です」を強化しながら丁寧語で締めくくっている。事例 1 でも述べたが、Gatsby の発話は常におかしいほど丁寧であるので、このような発話形式は Gatsby にふさわしい。

村上は「ぎっしり金が詰まっている」と表現した。“Ideophone” (“expressive and iconic, creating sound images” (Hasegawa 51)) の一種である「ぎっしり」を使用することによって、その莫大な富の量をイメージすることを容易にしている。

小川は「金にまみれた」と負のイメージで表現した。「まみれ」は『デジタル大辞泉』によると、「名詞の下について、そのものが一面に汚らしい感じで見えていることを表す」と定義され、読者は Daisy がなにか悪事の結果手にした金に囲まれているようなイメージを抱いてしまうかもしれない。しかし、Daisy の声は美しくなければならぬのである。続く Nick のナレーション、“. . . that was the inexhaustible charm that rose and fell in it, the jingle of it, the cymbals’ song of it . . .” (154) がその声の美

しさを証明している。

### 事例 B-2-2 “the inexhaustible charm that rose and fell in it”

上記 Nick のナレーションの中から Daisy の声についてももう少し着目したい。このように美しい彼女の声については、彼女に思いを寄せる男性にとって抵抗できないほどの魅力をたたえていることが以下のように別の箇所でも Nick が説明している。

low, thrilling voice. It was the kind of voice that the ear follows up and down, as if each speech is an arrangement of notes that will never be played again. . . . an excitement in her voice that men who had cared for her found difficult to forget: a singing compulsion, a whispered “Listen,” a promise that she had done gay, exciting things just a while since and that there were gay, exciting things hovering in the next hour (12).

このような魅惑的な声を三者はどう訳したかを見てみたい。

野崎：「・・・高く低く波動するあの声の尽きせぬ魅力はそれだったのだ。・・・」  
(196)

村上：「・・・蠱惑がそこから尽きることなく立ち上がり、そして降りていくのだ。・・・」(218)

小川：「・・・あの声が上昇し下降し、・・・どこまでも魅力をまき散らすのは・・・」(195)

野崎は「高く低く波動するあの声の尽きせぬ魅力」と訳し、原文の美しさをよく表している。

村上は「蠱惑がそこから尽きることなく立ち上がり、そして降りていくのだ」とした。「蠱惑」はどちらかというあまり日常会話では使用しない用語であるが、『デジタル大辞泉』が例文として「男を蠱惑する」をあげているとおり、男をうっとりさせ魅惑するというような意味合いがある。Nick が上記引用（下線箇所）で説明しているような、彼女を想う男にとっては忘れがたい、Daisy の声（話し方）を表すのに適当な語の選択であると言える。

小川は「上昇し下降し・・・どこまでも魅力をまき散らす」とした。小川訳はここでもあまり美しくない。「まきちらす」を『デジタル大辞泉』で調べてみると「あた

り一面に広がるようにまく」となっているが、そこに示された例文によると広がるように撒かれるものは悪臭やうわさなのである。

**事例 B-3 “So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past” (233).**

野崎：「こうしてぼくたちは、絶えず過去へ過去へと運び去られながらも、流れにさからう舟のように、力のかぎり漕ぎ進んでゆく。」(300)

村上：「だからこそ我々は、前へ前へと進み続けるのだ。流れに立ち向かうボートのように、絶え間なく過去へと押し戻されながらも。」(325-326)

小川：「だから夢中で漕いでいる。流れに逆らう舟である。そして、いつでも過去へ戻される。」(295)

この例文は Nick の心の中での思考である。しかし、Fitzgerald は主語を Gatsby や Nick とせず、“we” とすることであくなき夢に向かって人生を漕ぎ進む我々自身とし、テーマを普遍化した。この事例の一つ前の文は “To-morrow we will run faster, stretch out our arms farther. . . . And one fine morning——” (233) となっており、これは人間が自分自身の強い意思によって、夢、つまりアメリカン・ドリームを掴もうとして毎日必死に努力していることを示唆している。この文を受けて事例3のフレイズがあり、そして小説が終わる。この事例3のフレイズがこの小説の中で最も印象深いものであるとともに、アメリカン・ドリームを掴もうと努力するという普遍的な人間の欲望を、押し戻されながらも流れに向かってボートを必死に漕ぐというメタファーで表している。さらに、ここは Nick が Gatsby と彼自身のことを深く理解した場面でもある。Gatsby の夢は金や Daisy を手に入れることばかりではなかった。もっと大きな自分の夢に向かって一直線に努力していたはずだったのだ。ただ、悲しいことに現実には夢を掴むことはなかなか難しい。この文章、“He did not know that it was already behind him . . . Gatsby believed in the green light, the orgastic future that year by year recedes before us” (233) が示す通り夢はもう彼を置いて先へ行ってしまったのだということに彼は気付けなかった。

この最終場面では、Nick は、このように Gatsby のことを思い出しながら、自分も故郷のミネソタへ帰ろうとしていた。自分の本当の夢は東部で証券業で成功すること

などではなく、中西部にあると気付いたからである。だから、この時 Nick の眼前にはある種の希望があったはずで、先の “To-morrow we will . . . And one fine morning —” (233) も同時に考え合わせると、この最後のフレーズはポジティブな含蓄も含んで終了するはずである。

更にこのセンテンスは頭韻 “b” : beat, boats, borne, back で構成され力強く美しい。もし可能なら原文読者の受ける印象に近いものを翻訳読者も受けることが出来るように、この美と力を表現したいものだ。

では、三翻訳を順次分析してみたい。

まず統語から見てみると、野崎は日本語が普通そうであるように主要な動詞を一番後ろに置き「漕ぎ進んでゆく」としたのに対し、村上と小川は英語の順に従って訳しているので、文章が短く切れていて読みやすい。とは言うものの、野崎の文章は長い原文の美しさをよく表している。

更に原文に戻ると、“boats” は “we” でもあり、実際流れに逆らって行くのはこの “boats” である。“we” は一般化された人間を表し、“we beat on, boats against the current,” (233) は人々の夢を掴もうと未来に向かう絶え間ない努力を表現している。

野崎と村上は “boats against the current” を「流れに逆らう舟のように」や「流れに立ち向かうボートのように」と「ように」を使って直喩で表現しているが、これにより日本語読者に自身の夢を掴むことの困難さをよく想像させることができるだろう。小川は比喩的表現は使用せず「流れに逆らう舟である」と説明的に訳すにとどめている。

更に、文章の終わり方に注目したい。野崎と村上は「運び去られながらも」や「押し戻されながらも」というように「一も」で終わることによって後続に前向きな意味合いの文が来ることを想起させる終わり方である。小川は「そして、いつでも過去へ戻される」と説明的に終わるのみで救いがない。ここには日本語表現の違いばかりでなく、もしかしたらこの小説のテーマの解釈の仕方の違いが表れているのかもしれない。

夢を追うということは人間の普遍的な願望であり、この最後のフレーズではたとえ無理があったとしても自分自身の夢を追うための人間の飽くなき努力を表している。翻訳においても原文のこのようなテーマを考慮する必要がある。

少ない事例ではあったが、3事例の比喩的表現について分析してきた。それぞれのセンテンスの訳し方によって翻訳の効果も様々である。3翻訳のいろんな形の取り組みはあったが、Shani Tobiasも“there can be no definitive list of preferred strategies” (11) と言うように、決まったルールのようなものは存在しないということがわかった。

更に、翻訳者がテーマをどのように解釈するかが翻訳に影響を与えることも分かった。解釈した内容をダイナミックに日本語に移したとしても、たとえそれが自然な日本語であったとしても、作者の意図を読み取った翻訳でなければ原文読者が受け取る印象に近いものを翻訳読者が受け取ることは難しい。更に、*The Great Gatsby* の翻訳に当たっては原文の美しさや力強さもともに訳したいものだ。原文読者の印象に本当に近いものを翻訳読者も受け取るために。

## ま と め

小論を執筆するに当たって、*The Great Gatsby* を原文テキストとし、この小説の要点である“old sport”と比喩的表現の翻訳について、Nidaの“D-E”を物差しとして野崎、村上、小川の3翻訳について分析考察を試みた。

3翻訳を総括してみると、野崎訳は少し文体が古いようにも思うが、文章が美しく原文の美をよく表現している。村上は予想以上に原文に忠実で、カタカナ英語の使用が多く、特に「オールド・スポーツ」はそのままである。しかし、言語というもの(英語、日本語)に意識的である。小川訳はかなり自由で大胆である。彼自身の解釈に基づく大胆なパラフレイズによるところが大きいと考えられるが、日本語としては自然でも原文の良さが失われている部分も無きにしも非ずである。

三者ともそれぞれに学ぶべき点は多々あったが、上記で述べたように決定的な法則のようなものはない。しかし、最も重要な事は、文化や言語の差異を乗り越え、原作の全体的なテーマや文体を出来るだけ損なわないように翻訳に移すという点である。この小説で言えばテーマである人間の普遍的な願望である夢を掴みたいという欲求、そして文章の美しさや力強さを翻訳でどういう風に表現するか、3翻訳から多様な手法を学ぶことが出来た。

しかし、まだ造語や撞着語法などの翻訳研究はやり残しているので、今後の課題としたい。

## 注

引用文中の下線は筆者による。

## 附記

小論は2017年1月に受理された修士論文を修正・加筆し、日本語にしたものである。

## 謝辞

Juliet Winters Carpenter 指導教授を始め沢山の方々のご指導ご支援により修士論文を完成させることができ、ここに感謝の意を表する。

## 分析対象作品

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. London: Macmillan Publishers Limited. 2013.

橋本福夫『華麗なるギャツビー』東京 早川書房 1974

守屋陽一『華麗なるギャツビー』東京 旺文社文庫 1978

村上春樹『グレート・ギャツビー』東京 中央公論新社 2006

野崎 孝『グレート・ギャツビー』東京 新潮社 1974

小川高義『グレート・ギャツビー』東京 光文社 2009

大貫三郎『華麗なるギャツビー』東京 角川書店 1957

## 参考文献

文化庁 平成24年度「国語に関する世論調査」の結果の概要 (5 Apr. 2016)

Fitzgerald, F. Scott. *The Letters of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Andrew Turnbull. London: The Bodley Head. 1964.

Fordham University: The Jesuit University of New York. “The Banquet of Trimalchio from the Satyricon” (2 June 2016)

古野ゆり「日本の翻訳：変化の表れた1970年代」*Interpretation Studies*, No.2. December (2002): pp.114-122. (21 Nov. 2016)

Goossen, Theodore Ted. “Haruki Murakami and the Culture of Translation” in *In Translation: Translators on Their Work and What It Means*. New York: Columbia Univer-

- sity Press. 2013.
- Hasegawa, Yoko. 長谷川葉子 *The Routledge Course in Japanese Translation*. London and New York : Routledge. 2012.
- 井上史雄、柳村 裕「岡崎調査と文化庁調査の代名詞の変化」『日本語の大規模経年調査に関する総合的研究』(Ver. 1.1) 東京 国立国語研究所 2015 (8 Dec. 2016)
- 磯谷 孝『翻訳と文化の記号論－文化落差のコミュニケーション』東京勁草書房 1980
- 板橋好枝、高田賢一『はじめて学ぶアメリカ文学史』京都 ミネルヴァ書房 1991
- 上岡伸夫『ニューヨークを読む』東京 中央公論新社 2004
- Kelly, Richard T. *An Interview with Baz Luhrmann*. London : Pan Macmillan. 2013.
- 金水 敏『『男ことば』の歴史－『おれ』『ぼく』を中心に』『ジェンダーで学ぶ言語学』中村桃子編 東京 世界思想社 2010 : pp.19-34
- 小松寿雄「キミとボク－江戸東京語における対使用を中心に」『東京大学国語研究室創設100周年記念国語研究論集』pp.667-685. 東京 汲古書院 1998
- Laskow, Sarah. *Will the Real Great Gatsby Please Stand Up?* (10 Sep. 2015)
- Mangum, Bryant. “F. Scott Fitzgerald” *Critical Survey of Long Fiction English Language Series*. Revised Edition 3 Ed. Frank N. Magill. Pasadena : Salem Press. 1991.
- Matangi, Blair. Private correspondence. (18 Jan. 2016)
- 三島由紀夫『文章読本』東京 中央公論社 1973
- 三輪 正『一人称二人称と対話』東京 人文書院 2005
- 宮脇俊文『「グレート・ギャツビー」の世界－ダークブルーの夢』東京 青土社 2013
- 水村美苗『日本語が減びる時－英語の世紀の中で』東京 筑摩書房 2008
- Mizumura, Minae. *The Fall of Language in the Age of English*. Trans. Mari Yoshihara and Juliet Winters Carpenter. New York : Columbia University Press. 2015.
- Murakami, Haruki. “As Translator, as Novelist : The Translator’s Afterword” *In Translation : Translators on Their Work and What It Means*. Trans. Theodore Ted Goossen. New York : Columbia University Press. 2013.
- 村上春樹『バビロンに帰る－ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック2』東京

- 中央公論社 1996
- 永岡定夫「評価」『フィッツジェラルド 20世紀英米文学案内』pp.178-200 東京  
研究社出版 1966
- 長瀬恵美『グレート・ギャツビーの言語とスタイル』The language and style of *The  
Great Gatsby* 大阪 大阪教育図書 2012
- 中務哲郎「ミダス」日本大百科全書（ニッポニカ）の解説（21 May 2016）
- 那須省一『アメリカをさるく一名作の故郷を訪ねてー F. Scott Fitzgerald④』（10  
Sep. 2015）
- Nida, Eugene A. *Toward a Science of Translating: With Special Reference to Principles  
and Procedures Involved in Bible Translating*. Leiden: E. J. Brill. 1964.
- Nida, Eugene A. and Charles R. Taber. *The Theory and Practice of Translation*. Leiden:  
E. J. Brill. 1969.
- 野崎 孝『20世紀英米文学案内7 フィッツジェラルド』東京 研究社出版 1966
- 野崎 孝「偉大なギャツビー」『集英社版 世界文学全集』76 東京 集英社 1979
- 野崎 孝「偉大なるギャツビー」『研究社アメリカ文学選集』東京 研究社 1957
- 小川高義『翻訳の秘密ー翻訳小説を「書く」ために』東京 研究社 2009
- Ottman, Tina. Private correspondence. (12 Jan. 2016)
- 佐伯泰樹「村上春樹をめぐる冒険ー*The Great Gatsby*の翻訳」日本スコット・フィッ  
ツジェラルド協会ニューズレター 22号 (22 Sep. 2007) (18 Aug. 2016)
- 島田 誠「マエケナス」『日本大百科全書（ニッポニカ）の解説』（21 May 2016）
- 高野繁男『日本語になった西洋語 急増するカタカナ語』東京 大空社 2011
- The 100 Best English-language Novels of the 20<sup>th</sup> Century* (Voted by general public). Edi-  
torial Department of Modern Library in Random House. (7 Feb. 2016)
- Tobias, Shani. “Traversing Textual Terrains: The Translation of Metaphor in *Rashōmon*”  
*Translation Review*. Philadelphia: Taylor & Francis Group. 2015.
- 東洋経済 Online. (5 Jun 2016)
- Trask, David F. “The End of the American Dream” *Fitzgerald’s The Great Gatsby: The  
Novel, The Critics, The Background*. New York: Charles Scribner’s Sons. 1970.
- 内田 樹『日本辺境論』東京 新潮社 2007
- Usher, Shaun. “Something Extraordinary” *Letters of Note*. (8 Jun 2016.)

山西正子、山田繭子「『あたし』考」『目白大学人文学研究』(Vol.4) pp.183-200 (8 Dec. 2016)

柳父 章『翻訳とはなにかー日本語と翻訳文化』東京 法政大学出版局 1978

柳沢敦子 ことばの広場：原音に近づく外来語表記 東京『朝日新聞』(13 May 2015)